【フィリピン】

片隅に置かれた人びとの歩みを刻み、声を響かせる

宮脇聡史

フィリピンではかつて現地語による映画が活発に制作されてきた。しかし、近年はテレビの普及、ハリウッド映画人気による圧迫、映画館の入場料の高騰によって客足が遠のきつつあること、また、配給先の消極性などにより、芸術性の高い映画の制作環境は厳しいものとなっている。そうした中でも自主製作などの映画が健闘しており、また芸術的な映画の製作、鑑賞のための環境の充実を図る地道な働きもある。今回紹介する映画の監督マリルー・ディアス＝アバヤ女史も、近年後進の指導のための学校運営に力を入れてきた。

ディアス＝アバヤ監督は、一九九八年に『ホセ・リサール』のヒットにより大きな成功を収めた。フィリピン独立革命百周年の祝祭の高揚の中でとはいえ、三時間に及ぶ、そして有名な国民的英雄の生涯を描いた映画が前代未聞のヒットとなったのには、丁寧な画面作りによる雰囲気あふれる美しい画像、小説と伝記の交錯などの巧みな構成、味わい深い付帯音楽といった作品の水準の高さがもたらす強い説得力がある。

ディアス＝アバヤ監督は、『ホセ・リサール』に続き、一九九九年に『ムロアミ』で、美しい海の映像を背景に、児童労働による過酷な遠洋漁とそこにおける人間ドラマを細やかに描いている。これも娯楽映画の多いフィリピンでは異例なシリアスで地味な映画でありながら、その美しい画像と音楽、そして『ホセ・リサール』での名声ゆえもあり、人気を博した。そして、二〇〇一年の『光、新たに』（原題は『新月』）へと至る。この三作品により、ルソン、ビサヤ諸島、ミンダナオというフィリピンの主要三地域を舞台に作品を次々と生み出していったことになる。

この映画を取り上げるのは、フィリピンにおいて「モロ」と呼ばれるイスラーム教徒をめぐる現実を真正面から取り上げた映画自体が珍しく、その映画の完成度の高さと合わせて画期的な作品と呼ぶべきものと考えることが主な

理由であるが、特にこの原稿の執筆時点（二〇一二年一一月）において、ひと月前にディアス＝アバヤ監督の訃報が伝えられ、その直後にフィリピン政府と南部の分離独立組織モロ・イスラム解放戦線（ＭＩＬＦ）の停戦合意が報じられたタイミングも考慮している。

ミンダナオに生きる人々の過酷な現実

『光、新たに』は、一九九九年当時のエストラーダ政権によるＭＩＬＦとの全面戦争によってもたらされた深刻な事態についての静かで物悲しげなナレーションから始まる。フィリピン南部ミンダナオの風景がゆっくり映し出され、登場人物が少しずつ現れる。主人公の老母、妻、息子、そしてマニラの病院勤めの主人公が徐々に紹介されるも、私兵集団が平和な村を襲い、息子が流れ弾で絶命するシーンから、次第に緊迫の展開となる。ゆっくりした時間の流れの中に突如畳み掛けるように事件が襲ってくるという流れは独特の切迫感を感じさせる。伝統楽器を活用した音楽も、カメラワークの使い分けも、絶妙な緩急を通じて、静かで平和なはずの人々の暮らしが突如揺さぶられ、破壊され、引き裂かれていく様を生々しく伝える。

故郷に帰った主人公は母や妻とともに知人のイスラーム教指導者の末裔のところに身を寄せるが、そこも争いに巻き込まれ、追い立てられるように再び野山をさまよい、暴力集団化した民兵と連携した国軍も信用できないなか、行き場を失っていく。突如として居場所を失い、あてどなく彷徨い常に襲撃の危険に怯える。あまりに過酷な現実が追い立てるように次々やってくる様が生々しく、痛ましい。

そこには、紛れ込んだ少年、教会系の救援活動家、そして難民の中にもイスラーム教徒の妻のひとりなどのキリスト教徒も登場し、さらに反乱軍となったＭＩＬＦの民兵となった主人公の兄弟とその息子も絡んで、多くの激烈な議論とさまざまな人々の物語が交錯する。その中で、「モロ」と呼ばれるに至ったイスラーム教徒たちがフィリピンという国民国家の周辺的な存在として統合されるに至る歴史や、そこで生じた深刻な軋轢、差別、苦難、そしてそこでも宗教を超えて共存し、共闘する人々の姿が表現される。同時に、紛争に巻き込まれて彼らと旅をともにすることになった少年や現地に配属されたばかりの国軍少尉は、事情に無知なフィリピン人一般を代弁するような役回りとなっている。彼らやマニラで出稼ぎする主人公の医師の認識の変化の過程で明らかにされていくこうした啓蒙的な内容が、巧みなドラマ展開の中に濃密に織り込まれている。

かつてフィリピン北部と中部を支配するに至ったスペインを撃退した誇るべき過去、アメリカに対する抵抗と敗北、キリスト教徒移民の到来と紛争、先祖伝来の土地の喪失、そして一九七〇年代に本格化する「モロ」の独立闘争。現在にまで至る数百年に及ぶ攻撃、迫害の歴史と、信仰と誇りを守るための闘い。その中でのフィリピン政府・軍への抜きがたい不信が醸成されたいきさつ。他方でキリスト教徒との共存、宗教に関わりなく襲う紛争による犠牲、生活の破壊、難民化。宗教家たちによる宗派を超えた和平努力。登場人物がこれらを生身の人間として語る姿が描かれる。人口の九割を占める多数派キリスト教フィリピン人の多くには理解されることの少なかった現実の生々しい描写と表現は、画面上にその生きた現実を再現させ、見る者にこれを否みがたい現実として突きつける。

また、キリスト教とイスラームという二つの宗教の礼拝が幾度も並列的に描写される。それは、この二つの宗教に属する人々がそれぞれ尊厳ある存在であり、両者の相互理解、友好関係の促進、そして和解の道が未来を拓くことを示唆しているようでもある。長年ミンダナオの人々から自分たちの現実をもとに映画を作ってほしいと言われながら、キリスト教徒として自分に資格があるのかとためらい、映画を撮るために多くの勉強を含む準備をしてきたという監督の思いは、特に脇役の教会の平和ワーカーの宗派を超えた地道な奉仕活動の姿に現されているように思える。彼も愛する者を紛争で失った痛みを抱え、それがゆえに、和解のための働きに従事する者として描かれている。

無辜な犠牲の上に築かれる和解

このように、『光、新たに』は、ミンダナオの紛争の現実と、そこに生きる人々の誇りや尊厳に寄り添いながら、これをフィリピン人全体に向かって訴えかけるものとなっている。そしてそこには必然的に、「フィリピン人」という国民に向かう志向が明確に認められる。それは、映画の中で幾人かの「モロ」が「フィリピン人」を他者としてとらえ、「モロ人」としてのアイデンティティを高唱することによって代弁した立場を踏まえた上でなお、消えることのないものである。監督がフィリピンの三大地域の映画を立て続けに撮るに至ったことも、そのこととは無関係ではないだろう。

前作の『ムロアミ』も、本来ビサヤ語の世界を舞台にしながら全編がフィリピン語、すなわち国語になっているように、『光、新たに』でも、アラビア語が混じりはするものの、地元の言葉ではなく基本的にフィリピン語で一貫している。それはフィリピン人という国民共同体、特に映画の中で頻繁に言及される首都マニラへのメッセージであるとともに、映画の中の世界自体が国語を共有する空間となっている。だからといってモロの自治や分離独立の可能性を排除するものではないが、それを「フィリピンの問題」として考えるよう自然と促すものとなっているのではないか。

また、この映画は、過去二作との連続性を感じさせる面もある。いずれもセサル・モンタノ演じる主人公が、最後に代償的、犠牲的な死を遂げ、その死をきっかけに解放や平和が訪れる展開をとる。ここに、監督の一貫した理想、あるいは願いが反映されていると評者は考える。和解のために生き、死んでいくこと、そこに崇高なものを見出す、そういう理想である。またこの国には、さまざまな地域でさまざまなレベルで多くの無辜の犠牲があり、その上に現在の国の姿があり、今なお多くの犠牲が払われ続けているが、せめてその犠牲の上に平和な世の中を築いていくことが生き残った者たちの使命ではないかという願いである。

現代のキリスト受難叙事詩としての映画

義人の死が平和や問題の解決の端緒となるという展開は、フィリピンの少なからざる映画のモチーフとなっているし、一九八六年に独裁者マルコスを追い詰めた民主化政変の背後にあった一九八三年のベニグノ・アキノ元上院議員の惨殺への抗議、さらには一八九六年のホセ・リサールの処刑に対する人々の激高にも同様のモチーフが反映していたと指摘されることも少なくない。昨今では二〇〇九年のコラソン・アキノ大統領の闘病と死の姿が相次ぐ政治スキャンダルに倦み疲れていた人々の思いを高揚させ、それ以前は候補ですらなかったベニグノ・アキノ三世の二〇一〇年大統領選圧勝につながった面がある。そしていずれも、一九世紀末までの三百余年にわたるスペイン統治時代以来、人々の文化の底流にあった世界観、現地語のキリスト受難叙事詩「パション」の伝統につながる世界観と結びつくようなものをそこに見ることもできる。三作とも、旅をし、迷い、回心し、戦い、死ぬという「パション」と類似の流れを持っていることも想起させられる。この映画のこうした国民主義的、そしてキリスト教的な側面をどう評価するかは一つの重い問題ともいえるだろう。ただ、それはあくまでモロをめぐるさまざまな声を濃密なキリスト教文化のもとにあるフィリピン国民に向かって発していくというなかでのことで表れているということに留意したい。

この映画のDVDの入手が困難なことは残念だが、英語の字幕があり、入手できればフィリピン語を解さない方にも鑑賞可能なことは幸いである。機会あらばできるだけ多くの方々に味わっていただければと願う。

◉参考文献

川島緑（二〇一二）『マイノリティと国民国家』（イスラームを知る九）山川出版社。

レイナルド・C・イレート（二〇〇五）『キリスト受難詩と革命』法政大学出版局。

映画リスト

『光、新たに』……① Bagong Buwan〔新月〕、②マリルー・ディアス＝アバヤ、③二〇〇一年、④フィリピン、⑤フィリピン語、アラビア語、⑥アジアフォーカス・福岡国際映画祭（二〇〇二）。

『ホセ・リサール』……① Jose Rizal、②マリルー・ディアス＝アバヤ、③一九九八年、④フィリピン、⑤フィリピン語、スペイン語、⑥アジアフォーカス・福岡国際映画祭（一九九九）、岩波ホール（二〇〇一）。

『ムロアミ』……① Muro-Ami、②マリルー・ディアス＝アバヤ、③一九九九年、④フィリピン、⑤フィリピン語、⑥アジアフォーカス・福岡国際映画祭（二〇〇〇）。

著者紹介

①氏名……宮脇聡史（みやわき・さとし）。

②所属・職名……大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻・講師。

③生年・出身地……一九六九年、神奈川県。

④専門分野・地域……フィリピン地域研究（近現代政治史・宗教社会学）。

⑤学歴……東京大学教養学部（国際関係論専攻）、東京大学大学院総合文化研究科（国際社会科学専攻）。

⑥職歴……東京基督教大学講師（二〇〇一～〇七年）、准教授（二〇〇七～一二年）、二〇一二年四月より現職。

⑦現地滞在経験……フィリピンに二九歳から三〇歳まで、アテネオ・デ・マニラ大学フィリピン文化研究所客員研究員として約二年滞在。

⑧研究手法……カトリック教会の公式の教えと活動の政治的な意味を主な研究対象としているため、文献調査、分析が中心。

⑨所属学会……東南アジア学会、アジア政経学会、「宗教と社会」学会。

⑩研究上の画期……一九八六年二月の民主化政変。フィリピンにおいては政治・経済・社会の転機となるとともに、全世界的ないわゆる「民主化の第三の波」と呼ばれる現象の先鞭をつけた、初めてマスメディアで全国中継された民主化政変である。

⑪推薦図書……青山和佳『貧困の民族誌――フィリピン・ダバオ市のサマの生活』（東京大学出版会、二〇〇六年）。

⑫推薦する映画作品……『プロミス』（ジャスティン・ジャビロ、B・Z・ゴールドバーグ監督、二〇〇一年、アメリカ）。